福井県衛生環境研究センター研究員活動報告　概要

発表演題名	鶏肉におけるサルモネラ汚染状況および分離株の各種性状に関する検討
学会名	第２９回日本食品微生物学会学術総会
発表者名	山崎　史子（保健衛生部）
開催場所	広島市　広島国際会議場
開催日時	平成２０年１１月１３日（木）
発表内容	我国では 1999 年以降、サルモネラ食中毒件数は減少傾向にあるが、2007 年は細菌性食中毒の中ではカンピロバクターに次いで多く発生しており、患者数は第 1 位であった。原因食品は様々な食品があり、鶏卵に関連した食品が多いが、鶏肉は原因食品として重要視されている。また、食の安全安心への関心が高まる中、動物用抗生物質の使用による薬剤耐性菌の出現と、その食肉汚染が危惧されている。そこで、県内に流通する市販鶏肉におけるサルモネラの汚染実態調査を実施し、分離株の各種性状を比較検討したので報告する。 2007 年 4 月～2008 年 3 月に当センターに搬入された鶏肉 72 検体（国内産 56 検体および外国産 16 検体）からサルモネラの分離を試みた。サルモネラは 45/72 検体（62.5%）から分離でき、特に国内産では 42/56 検体（75.0%）から分離された。分離されたサルモネラの血清型は 9 種類あり、県内のヒトでも検出頻度が高い *Salmonella* Infantis が優位であった。12 種類の薬剤（ABPC、SM、TC、CPFX、KM、CTX、CP、SXT、Su、GM、NA および FOM）について薬剤感受性試験を実施したところ、供試した 70 株中 67 株（95.7%）が 1 剤以上に耐性を示した。また *S.* Infantis は 29/38 株（76.3%）が 4 剤以上に耐性を示し、多剤耐性株による鶏肉汚染が確認された。薬剤別の耐性率をみると、TC、SM、Su の順に 87.0%、79.7%、79.7%と耐性率が高く、これらの薬剤は 2001 年の抗生物質動物用医薬品の中で鶏における販売量が他の家畜より多かった。分離株数の多かった *S.* Infantis の 30 株をパルスフィールド・ゲル電気泳動（PFGE）により遺伝子型別したところ、制限酵素 *Xba*Ⅰでは 10 パターン、*Bln*Ⅰでは 13 パターンに分類され、各々2 株を除いて相似性は 80%以上であり、類似したパターンを示す株による汚染が示唆された。 近年、*S.* Infantis はヒトから検出されるサルモネラの上位 5 位以内に入っており、高頻度に鶏肉から検出され、しかも多剤耐性を示したことが注目された。